

松下幸之助記念財団 研究助成  
研究報告

## 【氏名】

山本孝子

## 【所属】(助成決定時)

京都大学

## 【研究題目】

駒澤大学図書館所蔵『五杉練若新學備用』巻中に見える書儀について

## 【研究の目的】(400字程度)

書儀とは、簡単にいえば、古人が手紙を書く際の参考に供するための模範文例集であり、唐から五代期にかけて盛んに編纂が繰り返されていた。しかしながら、いずれも夙に散佚してしまったため、これまでは敦煌寫本によってしかその内容をうかがうことができなかった。

本研究で取り上げる『五杉練若新學備用(五杉集)』は、五代・南唐期(10世紀中葉)に禪僧・應之により撰述され、夙に散佚したものと考えられていたが、近年駒澤大学図書館においてその朝鮮刊本が「発見」された。その巻中には僧尼に関わる「書儀」に相当する内容が収録されるが、まだ學界でも十分に知られていない。本研究では、この『五杉集』巻中について詳しく分析を試み、敦煌寫本書儀との比較を通して、書儀資料としての位置付けを明らかにすることを主要な目的とする。

## 【研究の内容・方法】(800字程度)

巻中には「僧五服圖」「龕柩孝堂圖」「吊慰儀」「祭文式様」「慰書式様」「諸雜書狀式様」が収録されている。内容の検討を行うためには、信頼できるテキストの存在が大前提となる。まずは公開されている寫眞畫像・實見調査に基づき、テキストの校訂作業から着手する。

これらはいずれも對應する内容を敦煌発見の吉凶書儀の中に見出すことができるため、差出人と受取人の関係(父母と子、師と弟子など)、書簡文の用途(季節のあいさつ、お禮の手紙、弔いの手紙、招待状など)によって関連する記事を抽出し、相互に比較検討する。特に、用途および差出人と受取人の関係を同じくする模範文について、僧侶のものと俗人のものでどのような違いが見えるのか、またどのような共通点があるのかを把握することに主眼を置き、言語表現によって書儀中に體現される尊卑・長幼・上下・親疎といった関係を確認する。

また、「諸雜書狀式様」後半部分には「十二月節令往還書様」が収録され、正月から十二月まで、月ごとのあいさつ文例が往復書簡の形式で順番に示されている。これは明らかに『月儀帖』(西晋・索靖月儀帖)や『朋友書儀』(敦煌発見)の流れを汲み、早い時期の書儀の様式を残すものである。『朋友書儀』から吉凶書儀への発展の過渡期的性格を有するものと考えられ、書儀の編纂様式・各模範文の書式・言語表現の淵源をたどる上でも重要な資料となるに違いない。まずは、『五杉集』の書儀資料としての位置付けについて検討を行う。

さらに、この書儀が朝鮮半島において寫本ではなく刊本のかたちで伝えられていた意義についても考えたい。「重祚壬午(1462年)」の書き込みも見え、のちの時代の書物にもしばしば引用されることから、實用書として広く用いられていたことが考えられる。

## 【結論・考察】(400字程度)

テキストを整理する過程で気づいたいくつかの点について検討を加えた。

まず現存する朝鮮刊本の特徴から、墨筆・朱筆による書き込みも少なくなく、「読み物」ではなく「實用書」として使用されていたものと判断した。15世紀の朝鮮半島において、中國で五代期に編まれた書儀が實用に供されていたことは非常に注目される。刊本として出版されていた、特に重版であるという事実は、

利用者からの需要の高さを示すと同時に、その普及により規範を根付かせようとするねらいが現れていると思われる。

巻末の「十二月節令往還書様」「四季惣叙」については、ひと月ごとあるいは季節ごとのあいさつとしてふさわしい文例が、概ね四字句・六字句を基調とする修辭的な文體によって示される。他の部分と比べてやや特殊な形式で記されており、應之のオリジナルのテキストには含まれておらず、後人(特に俗人)の加筆、あるいは他本からの紛れ込みのではないかという點を指摘した。但し、成立年代は『五杉集』と遠からざる時期に比定できる。